

詩

樹木派

高見順詩集

わが埋葬

死の淵より

重量喪失

補遺

さまざまな角笛

解説

清岡卓行



高見順全集

第二十卷

勁草書房刊

高見順全集 第二十卷

昭和四十九年八月十日印刷
昭和四十九年八月十五日發行

著者 高見順

發行者 井村壽二

印刷者 山田博

發行所 勁草書房

東京都文京區後樂二―二三―一五
電話東京八一四(六八六)〇
振替東京一七五二五三
©高見順 一九七四
(〇三九二―八三四〇〇―一八三六)

*本書の定價は外函に表示してあります

高見順全集 第二十卷

編纂委員

川端康成

伊藤整

澁川驍

平野謙

中村眞一郎

小田切進

目次

樹木派

樹木派

死、道、一草一花、試み、ひとり、喜び悲しみ、新緑、打診、扉の外、枝葉末節の揺れ、揺れてゐる、白い手袋、目に見える音楽、鳥の影、大和の椎茸、飽きない木、立つてゐる樹木、ツユ草、夕暮、景色、急ぐ蟲、晝、ある充實、雲と石、ダリア、九月某日、心の渚、黒、空を見てゐると、天の椅子、天の足音、空の要素、彼等、窓、葡萄に種子があるやうに、生、思ひ出が歸つて来た、内部、鳥、戦慄を持たぬ告知者、歌、葉脈、不安、智慧、何を尋ねて何千里、案外知られてない事實、未來、一度だけの人生、曇天、雨が降る、忍耐、影、深夜の樹木、批評、楽しみ、鉛筆、夜、苦しみ、黄昏、天の茶碗、去つて行く日々、同じ道、天、風、大正の少年、空の下、

作詩、病む詩、喜ばねばならない、波、樹木派

抒情系樹木派前期

デューラーと樹木、梅、馬遠筆寒江獨釣圖、樹木(一)、樹木(二)、樹木(三)、樹木(四)、現在、光(一)、光(二)、光(三)、光(四)、光(五)、光(六)、光(七)、光(八)、光(九)、光(十)、光(十一)、光(十二)、僕は衰へてゐる、消えろ、骨、いきであるな、出發、旅、優美なるもの、足音、燃えてない、ガラス、自殺する椅子、極めて寫實的な肖像畫、夜明けの痛み、さういふ笑ひは僕には困る、無題、爪のホシ、音樂、事件、

高見順詩集

いつからか野に立つて

いつからか野に立つて、マッチ、出口、猫、觸手、果實が美しく、けもの等とともに、その部屋に入ると、待つてゐると、美しい五月の朝なのに、過去の豚、顔、二つの影、私にはそれが見える、地圖

樹木派後期

ベンチ、光るもの、私の聖者、夜のコーヒー茶碗、私のなかを、僕

だけの光り、ジャツクの豆の木

わが埋葬

おれの期待 一、おれの期待 二、おれの期待 三、おれの期待 四、
おれの期待 五、幸福、口耳、さまざまな時のなかで、わが願い、
虹、天の聲、消えたがる、浚渫船、この盲目、蜜蜂のようなものが、
冬は、岩と風、風、わが埋葬、怒り、けむり、白い馬、みんな山へ、
地上の愛、心の底を、ショウ・ウインドウ、黒い船、ノアの酒

死の淵より

死の淵より

I

死者の爪、三階の窓、ぼくの笛、歸る旅、汽車は二度と來ない、死
の扉、泣きわめけ、赤い實、突提の流血、渴水期、不思議なサーカ
ス、魂よ

II

青春の健在、電車の窓の外は、生と死の境には、みつめる、小石、愚かな涙、望まない、花、夢に舟あり、黒板、文士というサムライ、ハヤクオイデヨ、巻貝の奥深く、荒磯

III

陽氣な鬼、黒くしめった、圓空が佛像を刻んだように、洗えと言う、庭で(一)、過去の空間、車輪、血だらけの手、耳のある自畫像、明治期、大正末期、昭和期、讃歌、巡禮、おれの食道に、庭で(二)

「死の淵より」拾遺

おそろしいものが、この埋立地、心のけだもの、心の部屋、抜け毛、執着、砂、水平線の顔、夜の水、ケシの花

「わが埋葬」以後

奴の背中には、まだでしょうか、揺れるブランコ、醜い生、告白、恥、オルガン、ラムネの玉、とびきり上等なレットル、失われたタヌキ、老いたヒトデ

重量喪失

重量喪失

序の詩、空を見てゐるとⅡ、空を見てゐるとⅢ、流派、芽、露命、差別、みんな家においてきた、奇怪な腐敗、リアリズム、朝の土、芽Ⅱ、色眼鏡、鏡、煽情的な空、雲、八月三十一日、制作、蜂、蚊、蟻、心のやうに、炎天、あるいつとき、積木、落葉せぬ、好き嫌ひ、いやな熱、喜び、サイコロ形の世界、重量喪失、目に見えない海、魔法のバスケット、注射、賣られる神、氣分、圓光ある想ひ、童謡、素足の心、耳の虫、十月、陷星、私にはそれが見える、川、墓場の苔、童話、扉、淵、食べもの

重量喪失拾遺

牧溪の虎、樹木五、樹木六、樹木七、ある樹木《樹木八》、餓鬼、心境、竹、私の心は盲ひてゐる、私の卵、いやな蛇、くたびれた犬、種子、燃えろ、金網の如く、畫面、小さな箱、小さな聲、小さな魚、小さな石、波の音、旅藝人、霧、われは草なり、秋の夫人、夜の影、光、今日もまた……Nに、天景、道ばたの花、昔の風、見えてくる、

畑の地、凍土の大根、不思議な力を心に覺える

補遺

無題、三十五歳の詩人、ノロシ、歌、自らに與へる詩、冬、彼、或る日曜日の記録、禪月大師筆十六羅漢の一、部屋に鍵をかけて、窓、新しい年が

さまざまな角笛

解説 清岡卓行
解題

樹
木
派

樹
木
派

死

こつそりとのばした誘惑の手を
僕に氣づかれ

死は

その手をひつこめて逃げた

そのとき

死は

慌てて何か忘れものをした
たしかに何か僕のなかに置き忘れて行つた

道

ひとすぢの本道
無数の横道

半日

それについて
考へた

横丁は

總じて

賑やかだつた

路地といふものは
誘惑的であつた

一草一花

うつらうつらとしたひとときに

楽しい眺めを夢に見た

見渡すかぎりのすべての草木が

一本について必ずひとつ宛の花を持つてゐる
すべての人に必ずひとつの喜びがあるやうに

試 み

庭の新緑を
寝たまま